

『古事記』中の「還」と漢籍中の「還」

— 動詞例における意味・用法の比較 —

佐藤 麻衣子

一 はじめに

『古事記』の本文は漢字によって日本語を書き表すことを目指したものと考えられる。そこで用いられる主要な文字は訓を書き表す機能を担っており、訓字とも称される。しかし、一方で、そこで用いられる文字は、字面を見ると、古代中国語の文字と、多くの場合一致する。意味・用法の面でも、古代中国語における漢字のそれとの関係が看取される場合がある。本稿で取り上げる『古事記』も、「元の場所に戻る」意味の用例が見られる点など、古代中国語の「還」との関連性が考え得る。本稿では、『古事記』中の「還」と漢籍（『礼記』『漢書』『世説新語』を比較資料とする）中の「還」を意味・用法の面から比較・対照し、その関係を調査する。

筆者は、佐藤「二〇〇六・二〇〇九」²⁾（以下、この二稿を合わせて前稿と呼ぶ）により、『古事記』の「還」「返」の動詞例の意味・用法の分析を行った。その結果、先行注釈で「カヘル」や「カヘス」の訓が与えられ、同訓異字・類義字と位置付けられる両字が、意味・用法の面で、かなり微細に明瞭に使い分けられていることが明らかとなった。『古事記』の両字には、前稿以前に、倉野「一九六九」

と小林「一九八二」⁵⁾があり、「還」は基本的に自動詞「カヘル」に一致し、「返」は基本的に他動詞「カヘス」に一致する、という偏りが指摘されていた。これに対して、前稿は、両氏の指摘を、両字の用法上の偏りの特に顕著な一つと認めた上で、字毎の動詞例における意味を、「還」は〈移動主体が移動の帰起点⁶⁾から帰着点へ位置変化する〉、「返」は〈移動主体が帰起点において方向転換し帰着点へ向けて始動する〉と記述した。『古事記』の両字は、いずれも〈具体的主体が行き着いた場所から元居た場所へ戻る移動〉の意味に関わり用いられるが、移動の起点側の動きの表現を担うか、移動の着点へ到達する動きの表現を担うかで、文字の微細な使い分けが行われており、本稿で見る「還」は、後者、着点へ到達する動きに用いられる（ただし、この結論に対して解釈を保留している「還」が五例ある）。

前稿では、これまで用法上の一側面の指摘に留まっていた『古事記』の「還」の意味・用法が、より総合的に明らかとなったと言えるが、残る課題もある。たとえば、『古事記』の「還」の意味は、「返」との意味分担を行うことにより、かなり狭いものとなっているが、その意味・用法は漢籍中の「還」とそのまま一致するものであるの

か、異なるものであるのか、調査する必要がある。また、前稿では他動詞一例と、自動詞四例の解釈を保留しており、それらの位置付けを行う課題もある。保留例の位置付け次第では、『古事記』の「還」の動詞例の意味⁶について新たな理解が加わる可能性もある。本稿は、これらの課題解明のために以下の点を中心に調査・分析を行う。

〔a〕 対象とする調査資料に『古事記』の「還」と一致する意味・用法の「還」の用例が見られるか。

〔b〕 対象とする調査資料に『古事記』では「返」と一致する意味・用法の「還」の用例が見られるか。

〔c〕 対象とする調査資料に『古事記』では「還」にも「返」にも一致しない意味・用法の用例が見られるか。

〔d〕 cの用例は具体的にどのような用例であるのか。

そして、これらの調査・分析結果を基に、改めて『古事記』の「還」について考察を加える。論の構成としては、まず調査の対象と方法について触れ（第二節）、『礼記』（第三節）、『漢書』（第四節）、『世説新語』（第五節）の順で、「還」の用例分析を行い、この結果を基に、『古事記』の「還」についての考察をする（第六節）。

二 調査の対象と方法

調査対象は、『古事記』成立（序文から七十二年と推定）以前の成立が推定される漢籍の中から、時代・ジャンル・作者等が異なる『礼記』『漢書』『世説新語』とする。これらは、いずれも、藤原佐世撰の『日本国見在書目録』に記載が見られ、少なくとも平安前期には日本に渡来していたか⁷と思われるものである。

『礼記』は、周末～秦漢時代の礼に関する諸説を集めた経書で、成立年代は未詳であるが、後漢末・鄭玄の注があり、それ以前の成立であることが推定される。日本においては、『養老律令』『学令』に「凡経、周易・尚書・周礼・儀礼・礼記・毛詩・春秋左氏伝。各為三経。」とあり、大学寮で扱われた典籍と見られる。本稿の調査では、『十三経注疏』（藝文印書館）を底本とし、用例解釈にあたっては、同書の鄭玄注と唐・孔穎達注を参考とする。

『漢書』は、漢の高祖から平帝までの歴史を記した歴史書で、後漢・班固の撰である（一部、妹の班昭の補修部分がある）。本調査では、『二十五史補編』（台湾開明書店）を底本とし、用例解釈にあたっては、唐の顔師古注を参考にする。本稿の調査範囲は、本紀と志とする。

『世説新語』は、後漢末から東晉末までの貴族・僧・文人らの逸話集で、六朝宋・劉義慶の撰である。本稿の調査では、『世説新語箋疏』（余嘉錫著作集、中華書局）を底本とし、用例解釈にあたっては、梁の劉孝標注を参考にする。

調査方法は、以上の資料の「還」の動詞例を、以下の観点から分析・分類し、『古事記』の「還」との比較を行う。

〔A〕 『古事記』の「還」か「返」に一致する意味・用法の用例（以下、「移動例」と呼ぶ）

〔A1〕 自動詞例

〔A1-1〕 『古事記』では「還」が担う〈位置変化〉の意味・用法の用例

〔A1-2〕 『古事記』では「返」が担う〈方向転換〉の意味・用法の用例

【A 2】 他動詞例

【B】『古事記』の「還」にも「返」にも一致しない意味・用法の用例（以下、「非移動例」と呼ぶ）

【B 1】 抽象的な意味の例（以下、「抽象例」と呼ぶ）

【B 2】 円周的な意味の例（以下、「円周例」と呼ぶ）

A、Bは、『古事記』においては「還」「返」が担う「具体的主体が行き着いた空間的場所から元居た空間的場所へ戻る移動」を表す例であるか否かの観点による分類、A 1、A 2は、Aの用例が自動詞か他動詞かの観点による分類、A 1-1、A 1-2は、A 1の用例が『古事記』では「還」「返」いずれで表記されると考えられる意味・用法の用例であるかの観点による分類、B 1、B 2は、Bの用例の意味的下位分類である。なお、Aの下位分類を「A類」、Bの下位分類を「B類」と呼ぶ。

A 1-1の〈位置変化〉とA 1-2〈方向転換〉を、『古事記』の用例から見ておく。

1 故、更且、還來、問「其大國主神」、「…」（上505）

2 …猶追、到「黄泉比良坂之坂本」時、取「其坂本」桃子三箇^上待擊者、悉^上逃返也。（上70）

健甕雷神が移動の着点に戻り大國主神と会話をする1の「還」のように、移動主体が移動の着点へ帰り着く意味が〈位置変化〉、雷神らが黄泉比良坂之坂本で来た道を引き返す2の「返」のように、移動主体が移動の起点で方向転換して始動する意味が〈方向転換〉である。

また、B 2の「円周的な意味」とは、3のように、主体が円を描くような動きや状態であることを表す例を指す。

3 侍^二坐於君子^一、君子欠伸、運^レ笏、澤^レ劍首^一、還^レ屨、問^二

日之蚤莫^一、雖^レ請^レ退可也。（禮記、少儀）

3は、「屨」（靴）が「還」の対象となっており、『古事記』の「還」のように行き着いた場所から元の場所へ戻る意味ではなく、履いている靴を円を描くように動かす意味と考えられる。Bの用例は、大きく抽象的な意味の例と、3のように主体が円を描くような動きや状態である意味が読み取れる例に分かれるため、この分類を設ける。これらの分析観点に対し、『古事記』の「還」は、Bを持たずAに限定され、なおかつ、Aの中でも集中してA 1-1を担う。よって、A 1-1の有無により先の《a》が判断される。また、『古事記』の「返」は、A 2とA 1-2を担う。よって、A 1-2、A 2の有無により先の《b》が判断される。また、Bの有無により先の《c》が判断され、Bに属する用例を考察することで先の《d》が確認されるはずである。

三 『礼記』の場合

表1 『礼記』の「還」

分類		用例数
移動	自動詞	5
	他動詞	2
非移動	抽象例	7
	円周例	14
合計		28

【A 1】
【A 2】
【B 1】
【B 2】

表1に『礼記』の「還」の分析結果をまとめる。表の「移動、自動詞」

は先のA 1に、「移動、他動詞」は先のA 2に、「非移動、抽象例」は先のB 1に、「非移動、円周例」は先のB 2に、それぞれ相当する。A 1-1とA 1-2の分類に関しては、漢籍の例においては、いずれに分類するべきか判然としない場合がある

ため、数値化はせず、用例を提示する中で有無を述べる。表のまとめ方は、以下同様。

まず、A 1 は、五例中四例が A 1—1（以下の 4—7）、一例が A 1—2（以下の 8）の用例である。

4 還反、賞公卿・諸侯・大夫於朝、命相布德和令、行慶施惠、下及兆民。（禮記、月令）

5 還反、行賞、封諸侯。（禮記、月令）

6 還反、賞軍帥・武人於朝。（禮記、月令）

7 還反、賞死事、恤孤寡。（禮記、月令）

4—7 は、いずれも、着点としての宮に帰り着き、賞を行う文意で、『古事記』の用字で考えれば、「還」の例に近い。ただ、これらで注意されるのは、いずれも「還反」とあり、「還」単独例ではない点である。『還』単独例に限ると、『礼記』の「還」に、『古事記』の「還」と一致する用例はない。

8 吳侵陳、斬祀殺厲、師還出竟、陳大宰嚭使於師。（禮記、檀弓下）

一方、8 は、吳の師が起点としての陳を引き揚げて、国境を出る文意で、『古事記』の用字で言えば、「返」に近い。こちらは、「還」の単独例である。

A 2 には、9・10 の二例がある。いずれも圭璋を元の持ち主に戻す文意の他動詞例である。

9 卿為圭上擯、大夫為圭承擯、士為圭紹擯。君親禮賓、賓私面私覲、致饗饌、還圭璋。（禮記、聘義）

10 以圭璋聘、重禮也。已聘而還圭璋、此輕財而重禮之義也。（禮記、聘義）

これらに対して、B 1 は七例ある。たとえば、11 は、「還」の主体は陽気で、抽象的意味が読み取れる。

11 行春令、則其國乃旱、陽氣復還、五穀無實。（禮記、月令）また、B 2 は十四例ある。

12 既封、左袒、右還其封、且號者三、曰……（禮記、檀弓下）

13 妻對曰、「記有成。」遂左還、授師、子師辯告諸婦諸母名、妻遂適寢。（禮記、內則）

12 は、「還、圍也」の鄭玄注があり、葬儀の際の礼として、封をぐるりとめぐる文意と考えられる。13 も、「還、轉也」の鄭玄注が見られ、子が生まれた際の礼として、左に身体をめぐらせて、子を渡す文意である。

『礼記』の「還」には、移動例、非移動例、いずれも見られるが、非移動例が多数ある。移動例では、自動詞例、他動詞例、いずれも見られる。このうち、自動詞例では、五例中四例が『古事記』の「還」に一致する意味の例であるが、これらはいずれも「還反」で現れている。一方で、自動詞例の残り一例は、『古事記』の「返」に一致する例と見られ、これは「還」単独例である。非移動例では、抽象例、円周例、いずれも見られるが、特に円周例の用例が多数ある。『礼記』の「還」においては、移動例よりも円周例の方が多く確認される。

四 『漢書』の場合

次に、表 2 に『漢書』の「還」の分析結果をまとめる。

『漢書』の A 1 にも、A 1—1、A 2—2、両方の用例が見付かる。14・15 は、A 1—1 の用例である。

表2 『漢書』(本紀・志)の「還」

	分類		用例数
	移動	自動詞	
[A 1]		106	
[A 2]		4	
[B 1]	非移動	抽象例	4
[B 2]		円周例	1
	合計		115

- 14 高祖被_レ酒、夜徑_二澤中_一、令_二一人行_一前。行前者還報曰、「前有_二大蛇_一當_レ徑、願_レ還。」(漢書、高帝紀第一上)
- 15 十一月甲子、立_二后土祠_一于_二汾陰睢上_一。禮畢、行_二幸榮陽_一。還_二至洛陽_一、詔曰、…(漢書、武帝紀第六)
- 14は、先の様子を見に行かせた者が着点としての高祖の元に帰り着いて報告を行い、15は、武帝が着点としての洛陽に帰り着き詔を行う文意であるが、いずれも、『古事記』の用字で言えば「還」の例に近い。
- 16 行前者還報曰、「前有_二大蛇_一當_レ徑、願_レ還。」(漢書、高帝紀上)
- 17 雍王邯、迎_二擊漢陳倉_一、雍兵敗還_二走_一。(漢書、高帝紀第一上)
- これに対して、16・17は、A2―2の用例で、16は、道の先に大蛇が居るため、起点としてのその場から引き返そうと提案し、17は、雍兵が漢兵に敗れ起点としての戦地から逃げ戻ってゆく文意であるが、これらは、着点に到達する意味が読み取れず、『古事記』の用字で言えば「返」の例に近い。

次に、A2は四例ある。たとえば、18は、昌陵への移住者を本居に戻らせる文意で、他動詞例である。

18 作治五年不_レ成、乃罷_二昌陵_一、還_二徙家_一。(漢書、五行志第七上)

『漢書』は、B類が僅少であるが、次に、B1に四例、B2に一例ある。19はB1の例で、布告した政令が元に戻される文意である。

表3 『世說新語』の「還」

	分類		用例数
	移動	自動詞	
[A 1]		82	
[A 2]		8	
[B 1]	非移動	抽象例	
[B 2]		円周例	1
	合計		91

- 19 是以、政令多還_二、民心未_レ得、邪說空進、事亡_二成功_一。(漢書、元帝紀第九)
- B2の一例は20で、「還、繞也」の顔師古注があり、廬をめぐることを植える文意と考える。
- 20 還_二廬樹_一桑、菜茹有_レ畦、瓜瓠果蔬、殖_二於疆易_一。(漢書、食貨志第四上)
- 『漢書』の「還」にも、移動例、非移動例、いずれも見られるが、『礼記』と異なり、移動例が圧倒的に多数である。移動例には、自動詞例、他動詞例、いずれも見られる。自動詞例には、『古事記』の「還」に一致する用例が多数確認できる(『漢書』ではいずれも「還」単独の例である)が、一方で、『古事記』の「返」に一致する用例も見出せる。非移動例では、抽象例、円周例、いずれも見られるが、特に円周例は一例のみで、円周例が多数を占めた『礼記』と異なる。

五 『世說新語』の場合

次に、表3に『世說新語』の分析結果をまとめる。

- 『世說新語』のA1でも、A1―1、A1―2、いずれも見付かる。
- 21・22は、A1―1の用例である。
- 21 張還_二船_一、同侶問_二何處宿_一。(世說新語、文學第四)
- 22 帝大怒、還_二内_一、作_二手詔_一、滿_二一黃紙_一。(世說新語、方正第五)

21は、張が着点としての船に帰り着いて同侶に質問を浴びせられ、22は、帝が着点としての内裏に帰り着いて手詔を作る文意であり、いずれも、『古事記』の用字で言えは「還」の例に近い。

23 賊相謂曰、「我輩無義之人、而入有義之國。」遂班_レ軍而還、一郡並獲_レ全。(世説新語、德行第一)

24 阮光祿、赴_二山陵_一、至_レ都、不_レ往_二殷劉許_一、過_レ事便還。諸人相與追_レ之。:(世説新語、方正第五)

これに対して、23・24は、A1―2の用例で、23は、荀巨伯が病の友人を見捨てて胡賊から逃げることをためらっていると、胡賊が荀巨伯の義に心を動かされ、軍を引き揚げ、起点としての荀巨伯らの居る場所から引き返して行つたという文意、24も、阮光祿が起点としての都から引き返すと、諸人が追いかけてきたという文意であり、これらは、『古事記』の用字で言えは「返」の例に近い。

次に、A2は八例あり、たとえば、25は、娘が王戎にお金を返す他動詞例である。

25 王戎女適_二裴頠_一、貸_二錢數萬_一。女歸、戎色不_レ説。女遽_レ還_二錢_一、乃釋然。(世説新語、儉嗇第二十九)

これに対して、B類については、まず、B1は、調べた限り、見られない。B2も、26の一例のみと思われる。26は、「面」が「還」の対象であり、「面」をぐるりと回して振りむく文意で、円周的な意味と考える。

26 周仲智飲_レ酒醉、瞋_レ目還_レ面、謂_二伯仁_一曰、:(世説新語、雅量第六)

『世説新語』の「還」にも、移動例、非移動例、いずれも見られるが、『漢書』同様、移動例が圧倒的である。移動例には、やはり、

自動詞例、他動詞例、いずれも見られる。自動詞例にも、『古事記』の「還」に一致する用例が多数確認できるが、一方で、『古事記』の「返」に一致する用例も見出せる。非移動例では、抽象例はなく、円周例が一例あるのみである。特にA類の分布について、『漢書』と『世説新語』は似ている。ただ、『世説新語』はB類が一例のみであり、この点では、『古事記』の「還」に近い。

六 漢籍中の「還」から見た「古事記」中の「還」

分類		漢籍「還」			古事記	
		礼記	漢書	世説新語	「還」	「返」
【A1】	自動詞	5(※)	106	82	48	6
	他動詞	2	4	8	1	16
【B1】	抽象例	7	4			
	円周例	14	1	1		
合計		23	115	91	49	22

ここまでの調査結果を基に、『古事記』の「還」について考察を加える。まず、先の《a》については、漢籍にも『古事記』の「還」に一致する意味・用法の「還」が見られることが確認され、《b》については、漢籍には、『古事記』では「返」と一致する意味・用法の「還」も見い出せることが分かった。《c》《d》については、漢籍には、『古事記』では「還」にも「返」にも一致しない意味・用法の「還」があり、本稿の調査で確認されたものは、抽象的な意味の用例と円周的な意味の用例であった。

表4に、三節く五節までの結

論と、それぞれの分析点に対する『古事記』の「還」「返」の用例分布をまとめる。表中の(※)は内四例が「還反」の例である。前稿で解釈を保留した用例は表に含めていない。

まず、表4から、いずれの比較資料にも、A類(A1・A2)が認められる。一方、『古事記』の「還」の動詞例も、A類(A1・A2)に多く分布している。このことから、『古事記』の「還」の動詞例が「具体的主体が行き着いた空間的場所から元居た空間的場所へ戻る移動」(A類)の意味を表すのには、中国側(これがより具体的な影響関係として、漢籍中の用字であるのか、漢字についての字書的な理解であるのか、などの考察は今後の課題とし、ここではこれらを広く「中国側」と称す)の「還」の意味・用法の影響が見て取れる。

また、表4の漢籍「還」には、いずれにもA2が見出せる。これに対して、『古事記』の「還」にも一例の他動詞例(「被還之事」、A2)がある。これは、『古事記』においては確かに少数例であり、前稿における解釈保留例の一つであるが、漢籍の「還」から見れば、中国側の「還」の用法に一致する例と考えられる。『古事記』の「還」「返」の自他の傾向については、先行研究において、『古事記』の両字の用字の顕著な相違点として指摘されているが、両字における自他の傾向差は『古事記』の両字の用法差としては認められるものの、中国側の「還」との関連を考慮した場合でも、両字の意味的な差異とは言えない。

また、三節～五節の分析で、漢籍のA1に、『古事記』では「還」が担う〈位置変化〉の意味・用法の用例(A1-1)に加え、『古事記』では「返」が担うと考えられる〈方向転換〉の意味・用法の

用例(A1-2)が、いずれの資料にも認められた。これに対して、前稿で〈位置変化〉の意味・用法の「還」とすることを保留した自動詞例がある。

27 即、以「墨江大神之荒御魂」、爲「國守神」而祭鎮、還渡也。(中532)

28 故、追退、到「山代」之時、還立、各不_レ退、相戰。(中546)

29 故、更、還泊多遲摩國。(中683)

30 如此歌而、還、暫入「坐筒木韓人、名奴理能美之家」也。(下54)

これらは、『古事記』における大多数の用例に見られる用法的特性が認められないことから、〈位置変化〉の意味が明瞭ではなく、解釈を保留としたものである。たとえば、27は、「還」で進行方向の転換をし「渡」の移動が起こると見られ、〈方向転換〉の意味とも取れる。28～30も、〈位置変化〉の意味は捉えにくく、〈方向転換〉の意味が考えられる。しかし、これらも、『古事記』の「還」の例としては意味的な少数例ではあるが、『古事記』の「還」の多数例(A1)が中国側の「還」と関係があり、その中国側の「還」に〈方向転換〉のA1-2があることを考慮すると、中国側の「還」における『古事記』の「返」と重なる意味・用法にあたる例と考えることも可能と思われる。よって、『古事記』の「還」の動詞例は、その大多数が〈位置変化〉の意味に偏り用いられているが、少数、『古事記』の「還」の動詞例にも〈方向転換〉の意味が読み取れる例も存する、と考える。

さて、このように考えると、『古事記』の「還」には、〈位置変化〉に加え、少数であるが〈方向転換〉の意味の例が見られることとな

り、佐藤「二〇六・二〇九」で行った『古事記』の「還」の動詞例の意味の記述にも、新たな見解が生じる。すなわち、『古事記』の「還」の動詞例は〈位置変化〉の意味が基本であるが、隣接する意味として〈方向転換〉の意味が現れることがあり、『古事記』の「還」の動詞例の意味¹⁰としては、〈具体的主体が行き着いた場所から元居た場所へ戻る移動〉とするのがより総合的な記述と考えられる。

ただし、前稿により導かれた『古事記』の「還」における〈位置変化〉の意味は、「返」を比較したときに、確かに際立っており、『古事記』において、「還」に顕著な意味的用法として注目される。『古事記』の「還」と「返」の意味的な使い分けを改めて表5にまとめる。表の「方向転換」は、〈具体的主体が行き着いた場所から元居た場所へ戻る移動〉において、移動の起点側で移動主体が方向転換し始動する意味であり、「位置変化」は、移動主体が移動の起点から移動の着点へ位置変化する意味である。『古事記』の「還」は、「方向転換」と「位置変化」の両方の表現を担うが、基本的には「位置変化」の表現に用いられ（表に○を付す）、「方向転換」と思われるものは比較的少ない（四例のみ、表では△とする）。一方、『古事記』の「返」は、いずれも「方向転換」の用例であり（表に○を付す）、「位置変化」は認められない（表に×を付す）。

表5 『古事記』の「還」と「返」の意味的使い分け

還	△	方向転換	位置変化
返	○	×	○

表を見ると、『古事記』の「還」の用字からは、『古事記』の「返」の用例も、「還」により表現できた、とも考え得る。しかし、『古事記』では、

〈方向転換〉に対しては「返」を用いるが、〈位置変化〉は「還」を用いず、「還」のみを用いている。他動詞の「還」や27・30の「還」は、その他の『古事記』の「還」と比べ、「返」の用例と意味的に接近するが、両字の多数例における意味的な傾向から考えると、『古事記』における両字は基本的に異なる意味を担うものとして用いられていると推量される。ただ、その基本的な意味が近いため、より接近した意味として、差異が認めにくい意味の用例が生じる場合があると、理解される。結果として同じような意味の表現を担い、先行注釈類では「カヘル」「カヘス」の同訓異字とされる両字であるにも関わらず、「還」のみを用いず、「還」と「返」をかなり微細に使い分けた点には、『古事記』の表記態度の一端が見出せるように筆者には思われる。『古事記』の「還」と「返」は、近い意味の表現を担う字でありながら、字の単位で固有の意味的統一により使い分けられている。

他に、表4に看取できる、漢籍「還」と『古事記』「還」の相違に、B類の有無がある。漢籍「還」では、いずれにもB類の用例が見られ、特に円周例は、『礼記』で最多数を占めるが、『古事記』「還」には、B類に属する意味・用法の用例はない。円周例について考察しておく。観智院本『類聚名義抄』の「還」の記載が「音環、カヘル、メクル、メクラス、シリソク、マタ、ヤム、又音旋、和外ン。」とあり、このうち「メクル」「メクラス」が円周例の訓とも考えられる。これに対して、『古事記』には、諸注釈で「メグル」や「メグラス」の訓が与えられる以下のような例がある。

31 「然者、吾與汝、行廻¹¹逢是天之御柱」而、爲美斗能麻具波比。」（上63）

32 自_レ其入幸、渡_二走水海_一之時、其渡神、興_レ浪、廻_レ船、不_レ得_二進渡_一。(中424)

31は、伊邪那岐命と伊邪那美命が柱の回りをまわる文意であるが、葬儀の際に封をめぐる12に類似するようにも思われ、32も、波に船がぐるぐるまわって進まない文意であるが、その動きは、履いている靴をめぐる3に類似するようにも思われる。『古事記』の「還」では、円周例のような意味の表現に「還」は用いなかったと考える。

以上、『古事記』の「還」の用例は、前稿で保留した他動詞例や〈方向転換〉例も含め、漢籍「還」との一致の点では、基本的に漢籍の「還」の用例範囲に収まる。しかし、逆に、『古事記』の「還」に対応する漢籍の「還」を見ると、B類の用例が外れる。また、漢籍「還」にA1-1もA1-2も見られることからすると、今回調査した漢籍中の「還」では、『古事記』における「還」の用例も「返」の用例も「還」のみで表記できたとも考えられ、意味・用法の幅を考えた場合、『古事記』中の「還」と今回調査した漢籍中の「還」には異なりがあり、『古事記』「還」の意味・用法はより狭いものである。

七 まとめ

ここまでで分かったことをまとめる。

① 『礼記』『漢書』『世説新語』の「還」の動詞例を調査した結果、表4のようにまとめられ、『古事記』では「還」か「返」の意味・用法に一致すると思われる例(A)も見られるが、『古事記』では「還」とも「返」とも意味・用法の点で一致しない例(B)も見られた。Aには、自動詞例(A1)、他動詞例(A2)い

ずれもあり、自動詞例においては、『古事記』では基本的に「還」が担う〈位置変化〉の意味・用法の例(A1-1)も、『古事記』では「返」が担う〈方向転換〉の意味・用法の例(A1-2)も見られた。Bには、抽象的な意味の例(B1)と、主体が円を描くような動きや状態である円周の意味の例(B2)が見られた。

② これらから、『古事記』の「還」の大多数を占める〈位置変化〉の意味の自動詞例はA1-1の漢籍の例に、『古事記』一例のみ見られる他動詞例はA2の漢籍の例に、前稿では保留とした四例はA1-2の漢籍の例に一致する意味・用法の例と考えられ、『古事記』の「還」の意味・用法は、基本的に、中国側の「還」との関係が指摘できる。しかし、一方で、漢籍の「還」にAとB、A1-1とA1-2があることを考えると、『古事記』の「還」「返」の用例は、漢籍の用字では「還」一字でも表現できたとも考えられ、また、漢籍の「還」には、『古事記』の「還」にはないBが認められ、『古事記』の「還」の意味・用法は、今回調査した漢籍中の「還」の意味・用法よりも、より狭いものである。

③ 『古事記』の「還」には、自動詞例も他動詞例も見られ、自動詞例には、大多数を占める〈位置変化〉例に加え、少数ではあるが、大多数例の意味に隣接する意味の例として〈方向転換〉例が現れることがある。このことから、『古事記』の「還」の動詞例の意味としては、〈具体的主体が行き着いた場所から元居た場所へ戻る移動〉とするのがより総合的と考えられる。前稿が指摘した『古事記』の「還」における〈位置変化〉の意

味は、「返」と比較した場合の際立った意味的用法と位置付けられる。ただし、『古事記』の「還」に〈方向転換〉例が認められても、〈方向転換〉に対しては「返」を用いるが、〈位置変化〉は「返」を用いず、「還」のみを用いる、という使い分けは顕著であり、『古事記』の「還」と「返」は、近い意味の表現を担う字でありながら、字の単位で固有の意味的統一により使い分けられていると言える。

『古事記』の本文が、正格漢文ではなく、漢字を用いて日本語を書き表す文章であるとする、完全に正格漢文に一致する表記を行うことは、むしろ、困難にも思われる。実際、本稿の調査においても、『古事記』の「還」について、②のような結論を得、また、③の通り、その大多数にかなり統一的な意味・用法が認められることが分かった。②における意味・用法の狭さや、③における意味・用法の統一の要因には、『古事記』が表記しようとしている文体の事情があると、筆者は推量する。しかし、一方で、本稿の調査からは、②のように、『古事記』の「還」が、(多数例から見ると)例外的とも言える数例も含め、基本的に中国側の「還」に関係を持っている実態がうかがえた。つまり、『古事記』の「還」の意味・用法は、多大に中国側のそれに一致していて、これに異なるのはより微細な部分とも見られる。これらを勘案すると、『古事記』の訓字の表記の態度の一端が推量される。すなわち、『古事記』の本文は、日本語を書き表すことを目指しているが、そこで用いられる訓字の意味・用法は、正格漢文と異なるものを目指すというよりも、それを拠り所として成立している。今後、他の字を対象に同様(『古事記』と漢籍)の比較・分析を行い、『古事記』の表記についての考察を

深めたいと思う。

注

(1) 「漢籍」という用語について、廣庭基介・長友千代治「一九九八」『日本書誌学を学ぶ人のために』(世界思想社)は「中国の人が中国の人のために、漢字その他縦書きの文字で記した書物をいう。」とする。本稿が『古事記』との比較資料とする『礼記』『漢書』『世説新語』は、この定義に当てはまる資料と考え、本稿ではこれらをまとめて「漢籍」と称する。

(2) 佐藤麻衣子「二〇〇九」「古事記」の「還」と「返」の用法と意味「会誌」27、佐藤麻衣子「二〇〇六」「古事記」の意味論的表記論——ユク(行・往)と「カヘル(還・返)」——『国文目白』45。なお、本稿における『古事記』の用例は、佐藤「二〇〇九」の校合に従う。また、用例には、真福寺本の巻と行番号を付す。

(3) 「返」はいずれも動詞例であるが、「還」には副詞が三例見られる。この「還」の副詞三例については、瀬間正之「二〇〇一」「古事記の漢語助辞——「還」の副詞用法を中心に」「書くことの文学」があり、「還」の副詞例が、中国の「還」の用法を受けたものであるという指摘がなされる。

(4) 倉野憲司「二九六九」「古事記の用字と訓の二三について」『国文学攷』50

(5) 小林芳紀「一九八二」「類義字一覧」『古事記 日本思想大系1』岩波書店

(6) 佐藤「二〇〇九」では、「行って帰る」などの言葉において、行き着いた場所から帰る際の移動の起点を「帰起点」と呼び意味記述に用いた。

(7) 「礼記廿卷」(漢九江太守載聖撰鄭玄注)、礼記廿卷(魏衛軍王肅注)「(禮家)」、「漢書百十五卷」(漢護軍班固撰太山守応劭集解)、漢書百廿卷(唐秘書監顔師古注)「(正史家)」、「世説十」(宋臨川王劉義慶撰劉孝標注)「(小

説家」とある（へは割書き）。本研究が用例解釈の参考とした『礼記』鄭玄注、『漢書』顔師古注、『世説新語』劉孝標注は、これらに記載を持つ注である。

(8) B2の円周的意味の例には移動に関わるものも見られる（用例3も靴の移動が読める）が、ここでは、呼称として、『古事記』の「還」「返」に一致点する移動の例を「移動例」、『古事記』の「還」「返」に一致しない例を「非移動例」とする。

(9) 3の「還」には「還音旋」の鄭玄注がある。「還」は、『爾雅』の「還、復返也」に郭璞が「還音旋」と注し、『説文解字』の「還、復也、从辵𠬞聲」に段注が「戸關切」とするように、複数の字音が考えられが、このうち、「旋」は、「旋、周旋、旌旗之指麾也」（『説文解字』）とあるなど円周的な意味がうかがえるため、3における「還音旋」の注は、音だけではなく義にも関係すると推量される。

(10) 観智院本『類聚名義抄』を見る限り「マクラス」と読める。ただ、「マクラス」の語は上代語辞典編修委員会編「一九六七」『時代別国語大辞典（上代編）』三省堂や、日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典』小学館などにも見られず、正宗敦夫「一九七〇」『仮名索引』『類聚名義抄2』風間書房にも「マはメカ」とある。また、調点資料を見ても「マクラス」の訓は見られないが、「メクラス」については、上野本『漢書』揚雄傳の天曆二（九四八）年点に他動詞の「還_メ」が確認される。これらから、本稿も、「マ」は「メ」と考え、「メクラス」とする。

付記 本研究は科学研究費補助金（特別研究員奨励費、研究課題…『古事記』

を中心とした古代日本語の文字・表記の研究」、課題番号…8931、研究代表者…佐藤麻衣子）の助成を受けたものです。